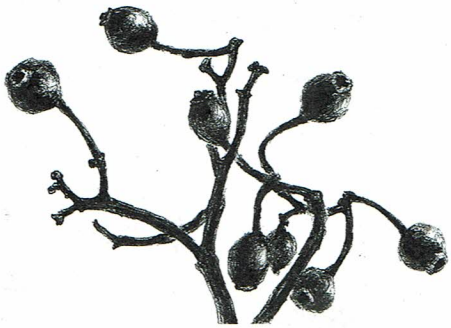
朝日 俳壇 歌壇



〈ノイバラⅣ〉　日高理恵子

高野公彦選

駅ピアノにショパン弾きたるイスラエルの青年は今ガザを撃てるや　（秩父市）畠山　時子

☆腕に名を書かれなければならぬ理由ガザの児は知る誰言わずとも　（堺市）芝田　義勝

世界中女性がトップになるならば戦争なんてする国はない　（町田市）高梨　守道

黒人の女性の歌うSUKIYAKIを独房に聴く甘き憂鬱　（アメリカ）郷　隼人

一万年縄文人は野に暮らし核の世われらはあと何年生きる　（門真市）前田喜代美

行かずが上、日帰りは中、泊まるは下　訪問マナー祖母に教わる　（千葉市）山口　麻理

庭の紫蘇花は天ぷら葉は薬味実は塩漬けに余さず使う　（横浜市）人見　江一

蝶の影蝶を離れて命あるものの如くに路上に弾む　（鴻巣市）松橋　雅実

断捨離し残せし一冊携へてあの世で読まむ「悪魔の辞典」　（沖縄県）和田　静子

多読より味読がだいじと言ひ訳し古るる眼と脳いたはる　（さいたま市）松田　典子

【評】一首目、良さそうな青年だったが、今ごろ出兵してガザを撃っているのか、と。二首目、理由は子供でもすぐ分かる。三首目、戦争のない世の中を願いつつ、ふとひらめいた想像を詠む。四首目、久しぶりの郷さんの作品。

永田和宏選

まだ書けぬ己が名腕に記さるをガザの幼は見つめてをりぬ　（中津市）瀬口　美子

乳のみごの服を鋏で切りひらきガザの医師団オペをはじめる　（稲沢市）伊藤　京子

モザイクがかかって見にくい物体が遺体だと知るまでの三秒　（五所川原市）戸沢大二郎

☆ラジオよりキュー・サカモトのSUKIYAKIが突然流れ来日本を想う　（アメリカ）郷　隼人

泣きながらぎゅっとどんぐり握ってた少年のまま七十超える　（浜松市）久野　茂樹

食草から一メートルほど移動して幼虫いつしか蛹になりぬ　（仙台市）小室　寿子

三メートル四方に増やしたフジバカマ旅の途中の蝶は訪ね来　（松阪市）こやまはつみ

チバニアン磁気反転の地層立つ養老川の水の清かり　（東金市）山本　寒苦

税下げりゃ支持率上がると思うとはナメられたものよ我ら主権者　（朝霞市）岩部　博道

ミャンマーの少年は地雷を踏んだと比喩ではなくて本当に踏んだ　（東京都）福島　隆史

【評】冒頭三首、死を前提として腕に名を書かれる幼な、服を切り裂いて為されるオペ、そしてモザイクの中のリアルな遺体。メディアを通じてではあるが、直接目にする光景の迫力が凄まじい。久しぶりの郷隼人さんの投稿が嬉しい。

馬場あき子選

怪我の子を抱きて「神よ」と叫びつつ瓦礫のなかを走る父親　（観音寺市）篠原　俊則

腕に名を油性のペンで書かれつつ父親の顔覗くガザの子　（堺市）芝田　義勝

原爆の実相伝える資料館十四言語の音声ガイド　（東京都）佐藤　研資

☆ラジオよりキュー・サカモトのSUKIYAKIが突然流れ来日本を想う　（アメリカ）郷　隼人

洒落た街東京銀座も今は昔百均店に外国人集う　（大和郡山市）宮本　陶生

画面から室蘭平で鳴り響くピアノの音色聞こえくる朝　（石川県）瀧上　裕幸

逆立ちで柱をつかみ産卵す大カマキリが目で威嚇する　（島根県）大野　重子

「クマっぷ」はかわいい名だが恐ろしき熊出没を示す地図なり　（富士市）村松　敦視

日本では「うさぎ」に見える月の模様インドでは「ワニ」モンゴルは「犬」　（戸田市）蜂巣　厚子

乳幼児学級の子等駆け回る柔道場の畳の優しさ　（関市）武藤　修

【評】毎日のように映像で報じられるガザ攻撃の状況。その中から戦争の悲惨な現実を永遠に訴え残そうとする歌が沢山投稿されている。第一首、第二首はその中から選んだ。第四首はアメリカの刑務所から。久しぶりの投稿に安堵。

佐佐木幸綱選

宝石を拾ったようなこころもち白寿を過ぎしひと日ひと日は　（我孫子市）松村　幸一

天平の赤き錦の幡のなか対の鴛鴦花銜えおり　（箕面市）大野美恵子

涙目の少女に会いに青森へ惜しくはなかった弾丸ツアー　（下呂市）河尻　伸子

☆腕に名を書かれなければならぬ理由ガザの児は知る誰言わずとも　（堺市）芝田　義勝

『日本産ゴキブリ全種図鑑』とふ書名妖しき呪文のごとし　（八尾市）水野　一也

かわいいというイメージが崩れ去りクマさんの絵を描けないでいる　（横浜市）萱谷　彩香

猪が大通りへとやってきて街と森とが不意に近づく　（宇都宮市）渡辺　玲子

若者はやはりとやかく言われてる五十年前の「暮しの手帖」　（宝塚市）小竹　哲

扇風機しまえばそこにぽっかりと誰かが座っていたような跡　（秦野市）三宅　節子

顔付きは民主主義でも背中には教育勅語が貼りついていた父　（福山市）岩瀬　順治

【評】第一首、一〇〇歳目前の心境をうたう短歌は、ほとんどまだつくられていない。一日一日を大切に作歌を続けてほしい。第二首、奈良国立博物館で開催された「正倉院展」、第三首、青森県立美術館で開催中の奈良美智展に取材した作。

俳句時評　尖鋭の受け皿

阪西　敦子

「文学フリマ東京37」が11月11日に開催された。出店者が「自分が〈文学〉と信じるもの」を展示して直接販売する大規模イベントだ。1843の出店があり、1万2890人が来場した。その中から、俳句同人誌3冊を紹介したい。

「天秤」は1990年代生まれの作家3人が制作。この日に合わせて作られた作品と鑑賞からなる創刊号は、自らの手による活動の場を得た楽しさに溢れる。山本たくみの新作〈はつ秋や納豆フィルムねぢり取り〉は、作業の体感を読者に伝え、初秋の空気の変化を描き出す。

2021年5月に創刊された「ねじまわし」の特集は「神野紗希はいま何を考えているのか」。創作の初期から常に注目されてきた作家を丹念に読み解く中で、俳句における日常性の位置づけ、口語と文語、作者と作品の同一性などを問い直す。例えば、神野の作品〈やさしいね涼しいね生きていたいね〉。季語「涼し」を句の中になじませつつ、語りかけの繰り返しの終わりに、「生きていたいね」によって日常と普遍を繋ぐ。

「オルガン」は2015年の創刊で、メンバーは5人。鴇田智哉の〈秋雨を象の黒眼の後ずさる〉は、象の体でなく黒眼を描くことで秋雨の明度・質感を描く。今回は「ねじまわし」のメンバーとの座談会も組まれた。俳句を俳句たらしめるものとは何かを、主題、季語、過去との関連、読みといった側面から探る。俳句の現在地がよく分かり、刺激的だ。

混淆の中に宿る尖鋭を示す3冊。独自の表現の受け皿としての文学フリマの役割に、今後も期待したい。（俳人）

風信

金子冬実著「まぼろしの枇杷の葉蔭で」
戦後を代表する歌人の一人で、「幻視の女王」とも呼ばれた葛原妙子について孫娘の目でつづったエッセー。（書肆侃侃房・1760円）

松村由利子著「科学をうたう センス・オブ・ワンダーを求めて」 ウイルスや原発事故、ＡＩなど科学を題材にこの10年余に詠まれた約300首の短歌を読み解く。（春秋社・2530円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやＳＮＳへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき１枚に１作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。